
死神さんの優しくない鎮魂歌

くろうんも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神さんの優しくない鎮魂歌

【Nコード】

N9605T

【作者名】

くろうんも

【あらすじ】

職業…死神な女性、来栖川菖蒲。いつものように人を殺し、魂を刈り取る仕事をしていた彼女であったが、一人の不可思議な少女の魂を刈り取ろうとしたところで別の死神に襲われ、少女の魂を守りながら戦うことになってしまう。

第一幕

振り下ろされる白銀の大鎌。体長二メートルほどもある大きな黒い狗の頭部に、先端が突き刺さる。堅い頭蓋骨ごと真つ二つに切り裂かれた跡から、血や脳漿の代わりに黒いガスが放出された。

一目見て、狗が即死したことが理解できるだろう。だが菖蒲は死体に目もくれず、その場でバックステップを踏んだ。悠長に確認している暇などない。

先ほど彼女が立っていた場所に、新たな狗が突進してきていた。なびく長い黒髪の手先に噛みつかれ、数本髪が引き抜かれる。

「いてえっ！　んなろーが！」

言いながら、菖蒲は大鎌の先端の刃を後ろに構え直す勢いを利用して、柄の先の方を下から上へ振り上げた。丁度、狗の顎にアッパーカットするような打撃が入り、怯んでへたり込んだ狗に、今度は柄が当たって反発する力を利用して、反対側にあった重い刃が上から下へ振り下ろされる。一匹目と同様に、それは正確に狗の頭部を挟み裂いた。やはり黒いガスが放出される。

狗が爆散する。頭から出た黒いガスを周囲に撒き散らしながら、跡形も無く一瞬で消え去る。

「だ、大丈夫？　お姉さん」

と。菖蒲の胸のあたりから、幼い少女の声がした。

菖蒲は先ほどまで、あれほど鮮やかな鎌捌きを、右手一本で行っていたのだ。そして、真っ白な包帯に一本一本の指先まで綺麗に包まれた左手は、その声の主である少女を、この虐殺劇を見せないよう、哀れなまでにまな板と言える菖蒲の胸に顔を押し付けさせるように抱きしめていた。

そして再び。音も無く、三匹の黒い狗が、中空から降り立つ。仲間を二匹を殺されて警戒しているのか、菖蒲に向かって、薄汚れた光を放つ乱杭歯をむき出しにして、あたかも地響きかというような

重低音の唸り声を上げている。

「ああ。つたくよー……」

菖蒲は、ウンザリしたような声を上げ、ぼやいた。
話は、三十分ほど前に遡る。

第二幕

とある総合病院の一室。

そこでは、今まさに息を引き取った一人の男性の主治医が、重苦しい雰囲気の中、「まことに残念ながら」と、定型文のような台詞を遺族らに言い放っていた。

だがしかし、遺族らはさほど残念がるそぶりも見せず、早速遺産の分け前について小さな声で相談、もとい喧嘩をしていた。

「おいこら！ なにをわしに勝手に決めとるんだ！ 誰にもやらん！ わしの金だ！」

そう顔を真っ赤にして激昂するのは、今ベッドで死体となった、えげつない悪徳商法で成金企業となった会社の社長……の魂であった。

お世辞にも、いや、お世辞を言う隙もないほど、醜く脂ぎった体をしており、ただでさえ吐き気を催すような外見をしているのに、それが魂となっているので当然服など着ているわけも無く全裸なのだから目も当てられない。

「あー。はいはい。もう魂になっちゃったんですからアウトですって。諦めてここにサインをお願いしますね？」

と。菖蒲は不快感をなるべく表に出さないように努めながら、柔らかな物腰で社長を嗜めつつ、仕事を遂行する。

菖蒲は、その場に場違いな、更にはこの世界においても場違いであろう、灰色と黒という、どこの邪神の遣いだと言わんばかりの巫女装束姿であり、更には菖蒲の身長の1.5倍ほどの長さの柄を持つ白銀の大鎌を持っていた。その鎌から推測は出来るだろう。菖蒲は、死神であった。

「バカなことを言うな！ 早く戻せ貧乳が！」

と。菖蒲が差しだしていたバインダーに挟まれた書類をむしり取り、菖蒲に向かって投げつける社長。哀れなまでにまな板と言える

菖蒲の胸にバシッ！と音を立ててぶつかり、地面に落ちるバインダ
ー。

そして次の瞬間には、菖蒲の我慢の限界が割とあっさり訪れた。
社長の体が、猛烈な力で菖蒲の方に引き寄せられる。

菖蒲が、胸倉……胸毛を鷲掴みにして、引っ張ったのである。

「あー！？ 人が下手に出て優しく接してやってんのにその態度か
よ！？ 大人なんだからよー、もうちょっとわきまえろや！？」

それは、ヤクザも裸足で逃げ出しそうな、圧倒的な殺気であった。
「ぐほあああ！ 痛い痛い痛い！ はっ！ 離せ！ 離してくださいさ
い！」

その恐怖と痛みに、社長は思わず涙を流し始めた。ただし、泣い
ても助けてくれる人は誰もいないのが現状である。

「自分が死ぬ、って認めるや！？ 私は貴様のようなヤツとは喋り
たくもないんだよ！ 仕事でもなあ！ 同じ空気も吸いたくないん
だよ本当は！ おら、さっさとサインしろよ！」

まるで闇金の借金取りである。その圧力は、社長の肝を粉々に潰
してもお釣りが山ほど返ってくる。

「ひいいい！ さ、サインします！ しますから！」

「じゃあさっさとしろや！」

今度は菖蒲がバインダーを投げ返す番だった。社長はバインダー
を辛うじてキャッチし、ガクガク震える手で、その書類のサイン欄
に、付属の羽ペン（型のボールペン）で名前を書いた。

「し、しました！」

「じゃあ死ね」

それを確認もせずに。菖蒲は右手に持っていた鎌を構えた。

「ひ、ひいいい！ あーっ！」

そして、そのまま振るう。そう、丁度、その本来の使い方である、
草を刈るように、横薙ぎに。

ベッドの上の死体から社長の魂が分離され、そのまま上へ上へと
浮き上がって行く。余りの恐怖に気絶した社長の魂が、病室の天井

を通り抜けて見えなくなった。

「……ふう。やれやれ」

先ほどまでの怒りはどこへやら。優しいお姉さんの風貌を取り戻した菖蒲は、バインダーの担当者欄の所にサインをした。

死神という仕事は、お役所仕事なのである。死神が刈り取った魂の扱いを、天使がデスクワークで決定する。言うなれば、死神は警察や消防員のような外に出て働く公務員であり、天使が役所でふんぞり返っている公務員というわけである。

そして一々書類を使って管理しなければならない。不備があるとまた天使が煩いのだ。最近は“電子化”というものも試験的に行われているらしいが、機械の類がからつきしダメな菖蒲にとっては憂鬱な話である。

「さーて次はー。次々ーってあれ……」

バインダーに挟んである書類をめくって次の仕事場所を見る。

同じ病院。この二階下。

しかし、先ほどまでの気楽げな表情は、今は曇っていた。

「……七歳の女の子かぁ。嫌だな、子供。心臓発作……か」

鎌の柄を下にして杖のように立て、それに寄り掛かって、右手の親指の爪を軽く噛みながら、神妙な口調で呟いた。

あんな乱暴な言動をしても、彼女は死神の中では割と感情的な、優しい部類に入るのである。これまで何度も子供の魂を天に送ってきたが、慣れたものではなかった。

「行くしか、ないんだよねー。はぁー……」

言って、菖蒲は大きなため息とともに、“下へ”移動するように意識を集中させた。先ほどの社長の魂とは逆方向へ。床を通り抜けて、下の階へと二階分移動。

降り立ったところは、手術室であった。しかし今まさに手術を受けているのは、急患で担ぎ込まれたらしいお爺さんである。

「仕事、増やさないでくれよー」

誰にも聞こえないが、そう言い残し、何の抵抗も無く壁を貫通し

て廊下に歩み出た。

時間は午前一時過ぎ。暗く、非常灯が煌々と輝く不気味な夜の病院の廊下を歩いていく。

懐中電灯を持った見回りの女性の看護師とすれ違った。当然の事ながら、菖蒲の姿は見えていない。

「えーっと。309……っと」

死亡予定が書かれた紙に視線を落としながら、病室を探す。

小児病棟の方へと移動して、ようやく発見する。六人部屋であった。

ちよつと憂鬱な気分になりながら、名札で死亡予定の少女のベッドを確認してから、中へと踏み込んだ。

子供たちの寝息だけが、静寂を破っていた。大きな窓の外から注ぎ込んでくる満月の光で、意外なほど病室の中は鮮明だ。

「えーっと、鈴原めぐみちゃん……」

「はーい？」

菖蒲は、その場で立ち止まった。何気なく呟いた独り言に、返事をされた。

有り得ない。自分の声など、聞こえるはずはないのに。

気のせい？ 気のせいだね、と言い聞かせながら、目的の窓際のベッドのカーテンの中に入ると、そこには、少女がいた。七歳、という書類通りの、幼い外見の少女が。桃色のパジャマに身を包んで、上半身を起こして座っていた。

菖蒲の姿を見て、少女は笑う。待ち望んでいたプレゼントが届いたかのような、明るさで。

一度、後ろを振り向く。自分の後ろに誰かがいて、その誰かに笑いかけている可能性も捨てきれなかった。しかし、誰もいない。

菖蒲は、恐る恐る、という感じで自分の顔を指差した。

「……えーっと。ちよつと聞いてみるけど、見えるのか？」

「見えるよ、死神さん」

なんということだ。この子は菖蒲が死神だということを認識して

いる。普通の人には見ることが出来ない存在だという自信を全否定され、不安定になる。

「私が死神だってわかるの？　まあ、こんな外見してるけど」

「病院にいたら結構見るよ？　いろんな死神さん。ヘンテコな格好してて面白い」

「……おおお、素で見えちゃうレアな子がここにいるよ……そういうのもいるって聞いたことあるけど、まさか……」

自分が死神じゃなくなったような錯覚を受けたが、他の死神が見えるということで、自分がイレギュラーではないと再認識。

驚愕の連続にすっかり疲れ果てた菖蒲は、手を額に当てて首を横に振った。

しかし仕事をしないわけにはいかない。気を取り直して、少女、めぐみに向き直り、右手で頭を掻きながら、少しバツの悪げに口を開いた。

「えーっと。まあ、分かるよな？　何のために私が来たか」

「殺しに来たんだよね？」

「そんな感じ。……あっさりしてるな？」

先ほどの社長もそうだが、大抵は、魂を刈り取る了承を得るのが、この仕事で一番難い。それは、もう三桁くらいの年月生きた末の大往生でない限りは、この世に未練が沢山あるから。至極、順当な話である。今から貴方を殺しますというニュアンスのことを言われ、了承する人はなかなかいない。

なのに、なんなのだ、この少女の達観具合は。

菖蒲は、少し怪訝な表情をすると同時に、心の中では拍子抜けしていた。泣き喚く子供をいかにたしなめ、刈り取るかを思案していたのに。

「あたしが、もうすぐ死んじゃう事、分かってたんだ。お医者さんも、お母さんも、治る治る、って言うてくれるけど、無理してるって分かってちゃうんだ。

ふと、めぐみが酷く物寂しげな笑顔を見せ、月の光が差し込む窓

の外に目を向けた。菖蒲には、その目が遙か遠くを見据えているかのように見える。

その酷く達観したような態度と言葉に、驚きを隠せない。到底、七歳の少女が見せるそれとは完全に逸脱してしまった感がある。

窓の外に視線を移しているめぐみの姿を見た。ケアだけは行き届いているらしく、艶々とした長い黒髪が、満月の月光に反射して、それは一種の芸術品のように感じられた。

「さ、お姉さん。お仕事、するんでしょう？」

「え？ あ、ああ、うん。そうだな。……よつと」

菖蒲がめぐみに歩み寄り、その小さな骨ばった固い背中を押した、次の瞬間。

めぐみの体から全裸になった半透明なめぐみが飛び出し、それと同時にめぐみの肉体がベッドに倒れた。死神が触れると、こうしてあっさり肉体と魂は分離する。

「うわ、ゆーたいりだつした！」

本当に変わった子だ、と思った。この状況を楽しんでいる風すらある。

調子が狂い、あまり釈然としない気分で、袖の中に入れているバインダーとペンを引っ張り出す。

「じゃあ、これから貴方の魂を刈り取るから。この死亡同意書にサインを……」

そして、それを差し出しながら説明していた、次の瞬間。

背筋に寒気が走った。野性的な、暴力的な、気配だけで食い殺されそうな、圧倒的な殺気。

「きやうっ!？」

反射的に。菖蒲は、バインダーを投げ出し、突然の行動に驚いて悲鳴を上げるめぐみの魂を左手で強く強く抱きしめ、左方向へ思い切り身を投げ出した。

めぐみの魂と共に壁を貫通し、そのまま下へ落ちていく。

脱出の瞬間、見た。どこからか入ってきた巨大な黒い狗が、菖蒲

らが立っていた場所を、あたかもナイフのような鋭い爪で引き裂いたのを。

「何なんだよ、一体！」

中空で体勢を建て直し、何も無い場所を蹴って上へ跳ぶ。全てを貫通する死神にとって、自分がそこだ、と思った場所が地面という概念である。

更に高いところで、地面と言う概念を蹴って跳躍。

病室から出てきた狗が、菖蒲と同様、空中を蹴って、飛び掛ってくる。

体を振って、それを数センチの差で回避、し、見た先に。更に四匹の狗が、そこにいる。

鋭い音を立てて、菖蒲は舌打ちした。

第三幕

菖蒲らを襲っている狗は、“下級戦闘死神”である。人間的な思考能力を持たず、本能のみに生きることしか出来ない、野性的な、攻撃力に特化した死神。度々、菖蒲ら大多数が属している中級／上級死神に使役される。今は狗の形を取っているが、使役する死神によってその形は多種多様である。

（やっぱ、誰かが使役してるんだよな、こいつら）

思考の片隅で思考しつつ、逆さにした鎌の柄の根元を持って、右から左へ横殴りに振り回し、同時に飛び掛ってきた狗の向かって右端の狗の胴体を殴りつけ、その衝撃で左にいる狗二匹を巻き込んで体勢を崩させた。

先端が重い刃になっている鎌の性質上、刃の方を振り回すと、隙が大きくなってしまう。

重くて鋭く、当たれば高い破壊力を誇るであろうが、しかし肝心の刃はとどめの一撃くらいにしか使えないのだ。故に、こうした柄での棒術が、鎌を使って戦闘行為を行う場合の主たる戦術であった。体勢を崩した狗の一匹に向かって、鎌を持ち直し、刃を先端にして上段に構えて突撃。振り、下ろした。

だが。

（浅い！？）

予定ならば頭部に当たって割り裂く予定だった鎌は、軸を外して犬の左前足を切り飛ばすのみに留まった。

空振りに近いその攻撃によって、今度は菖蒲が体勢を崩す番である。本来ならば狗の頭部をクッションにして反動の影響を殺して次の行動へ繋いでいるのだが、比べて脆い腕ではクッションの役割を果たさない。結果、刃先が地面という概念に弾かれる結果となった。「ぐっ……」

しかし、その崩れたバランスすら、菖蒲は回避行動への繋ぎとす

る。鎌が弾かれる反動を利用し、そのまま尻餅をつきそうな勢いでバックステップを踏んだ。

追い縋ってくる二匹の狗を確認し、菖蒲は更に概念を“決め付け”、本来の地面と比べて斜めに発生させた地面を蹴って、斜め上方に跳躍した。

「めぐみ、“生きてる”か？」

殺伐とした気分を少し和らげようと、両腕両脚を菖蒲の平たい胴体に巻きつけるようにしてしがみついているめぐみに、冗談めいた口調で言った。

「お、おわった？」

「おっと、顔上げるな。残念ながら、終わってな、いっ！」

追い縋ってくる狗の一匹に向かって、槍よろしく柄を突き出した。柄が狗の眉間に直撃して怯み、そのまま、突き出した柄を右に薙いで、もう一匹の狗に軽い打撃を加えた。

そして、柄の根元、刃の至近を握ったまま腕を大きく振り、刃を狗の胴体に突き刺す。肉を裂く不快な感触が、刃の反対側を持っている時以上にダイレクトに伝わって、一瞬寒気が走った。

そのままの勢いで、狗の胴体を貫通して飛び出た刃の先端を、隣の狗に力ずくで押し込んだ。

爆散。また、爆散。黒いガスを残して消えた二匹の狗。遅れて、先ほど脚を切り落とした狗が追いつがってくるが、もうここまできたら菖蒲の敵ではなかった。

丁重に、鎌を振り下ろし、頭から真っ二つにして差し上げた。

第四幕

こんな戦闘行動は、久しぶりだった。悲鳴を上げる筋肉を酷使しながら、高層ビルの屋上へと降り立ち、へたりこんだ。

「ぶはぁー！ こんな動いたの何十年ぶりだよーっ！」

「お姉さん強いんだねえ……」

感心するように言うめぐみに対して、コンクリートの上に座り込んで休憩している菖蒲は、ちょっと不本意そうに頬を掻いた。

「……強くないよ。腕力ばかり無駄にあつてさ。壊すことしか出来ないもん。そんなの、強さのうちに入らない」

言いながら、菖蒲は巫女装束の袖から見え隠れしている、包帯に包まれた自分の左手を見つめた。

「あの世、つてさ。大きく勢力が二分されてるんだよ。ウェイト様と、マルセイユ様っていう、強大な死神が総べてる。で、私はマルセイユ様の勢力に属してて。死神がそれぞれ担当する地域によって大別されてて。アジアとアメリカがマルセイユ様陣営。中東からヨーロッパがウェイト様の陣営、つて感じ。で、私人間だった時に日本に住んでたから、必然的にマルセイユ様直下の死神になったんだけど。この二人がまた仲が悪くて！ 同じ死神なのに、仕事に対するポリシーの違いっていうの？ それで度々対立しててさ。……六、七十年くらい前かな。些細な小競り合いから大爆発しちゃった時があつてさ。その時私、普通の死神じゃなくて戦闘中級死神、つていう、まあ、さっきから私ら襲ってきてる狗の人間版みたいなやつてて。そのせいで無駄に戦闘経験あるんだ」

「ふうん？」

長々と説明したが、まだ幼いめぐみの興味をそそるような内容では無い。適当な返事を返されちよつとだけ意気消沈してしまった。

「お姉さん、日本に住んでたんだ？ いつごろなの？」

「江戸時代、つて知ってる？」

「うーんと。昭和の前!」

「惜しい。いや惜しくないけど。まあ、私人間に換算すると今二百八歳だから、推測してくれよ」

「おばあちゃん!」

「黙らっしゃい! この美しいお姉さんに向かっておばあちゃんなど……。男にはもてたんだよ。伝染病であっけなく死んだ……けど……」

ふと、天を見上げた菖蒲が、絶句する。

黒い。夜なのだから空が黒いのは当たり前だとは思うが、そんな生半可な黒さではない。先ほどまで空で瞬いていた星が消滅していた。遠くを見ると星は見える。この上空だけが、丁度、ぽっかりと大穴が開いたように、黒い。

目を凝らすと、その黒い場所全体が、怪しげに蠢いているのが見えた。そう。まるで、何かの群れのような。

「クソが! 一体、何なんだよ!」

転がしていた鎌を取り、立ち上がり、忌々しげにその黒を見つめる。

狗。狗狗狗狗。五匹でも、めぐみを守りながらだとかかなりの苦戦を強いられたはずなのに。

その空を埋め尽くす黒全てが、狗だった。数えることすら不可能な数の狗が、こちらを向いて、牙をむいた。

黒さ全体に、乱杭歯の輝きが、まるで星の瞬きのように広がって行く。

めぐみが、菖蒲の袴をギュッと握って不安そうに見上げてくる。

と。その黒さの中央から、一層強い光を纏った人影が下りてくる。菖蒲とは対照的な、どこかのお嬢様のような豪華な金髪に、フリルをふんだんに使った黒い西洋ドレスを身に纏った、フランス人形のような外見の少女。気の強そうな猫目から発せられる眼光が、菖蒲を射抜いた。

そして、その左手に持つ、死神の象徴たる鎌は、血が滴ってきてそ

うな、鮮やかな赤。

高いところから、菖蒲を小馬鹿にしたような表情で見下ろしてくる。

「こんにちわ、同業者さん」

だが、その表情とは裏腹に、少女は丁寧なスカートの裾を両手でチョンと摘まんで、深々とお辞儀を菖蒲に向けた。そして、顔を上げ。

「早速ですが、順当な内容を要求します。その子を渡して貰いますよ、どうか」

丁寧な台詞の陰に混じる、侮蔑の色。割と短気な菖蒲の神経を、逆なでする。

しかし、そこはグツとこらえ、考えた。彼女の台詞通り、菖蒲も予想はしていたのだ。めぐみが、この戦闘の要因だ、と。

どんな要因かは分からない。しかし、これだけはわかる。この少女に渡すわけにはいかない。マルセイユ陣営の人間にこうして敵対的行動を取るのには、ウェイト陣営の死神しか有り得ない。

「そんなの、断るに決まってるじゃない？」

強がりのように、フンツと鼻で笑う菖蒲。逆に少女を挑発するような態度を取ると、その外見通り、プライドが高いのか、あっさり交渉の決裂を告げた。

「ならば、順当に、力づくで奪わせて貰いますね」

言って。少女は上方へと移動し、右手を上げた。そう、まるで戦国時代の武将が、兵卒に突撃を告げる直前のような――。

「伏せてろ！ めぐみ！」

言って。菖蒲は、袴にしがみついていためぐみを突き飛ばした。尻もちをついためぐみが、泣きそうになりながらその場で縮こまるのを確認もせず、巫女装束の上半身を肌蹴た。袖から両腕を抜くと、戦争の名残であろうか、傷だらけの右腕と、肩口まで包帯で覆われた左腕、そして、サラシを巻いた平たい胸と、健康的なゆるい括れを見せる白い腹と中央に穿たれた臍が露わになった。

それと、同時だった。少女が、上空で右手を振り下ろす。一気に、上空から、狗が津波のごとく、大気を凌辱するかのような密度を孕んで、殺到してくるのを、菖蒲はため息交じりに見つめ、左腕の包帯に手をかけた。

結び目を解くと、一気に締め付けが緩み、包帯が地面に落ちてその腕が露出する。

白い腕を侵食する、黒い模様。その模様は、見ていると精神的に不安定になってくるような禍々しさを孕んでいた。

菖蒲は、左手に意識を集中させ、掌を狗の群れに向けた。

「ぐっ！」

迸る。爆発するように、一瞬で周囲を埋め尽くす、黒いガス。

黒。圧倒的な、黒。狗の黒さなど、比べ物にならない、光を全て吸収しているかのような黒。

それと同時に腕に走る、鮮烈な痛み。血が出ているかと錯覚するほどのそれが、腕から、菖蒲の脳髓を電撃のように直撃する。

気絶しそうな痛みを無理やり噛みつぶし、左手を掲げ続けると、現れる。その黒いガスに、鮮やかなまでにぎらつく、二つの真紅の相貌が。

無形だったガスがやがて形取る、龍。菖蒲の左腕から、塔のような巨大な角を生やした、更に巨大な龍の頭部が生えていた。

菖蒲は、その龍を、狗の大群へ向け、手を開く。連動し、龍の口が開く。菖蒲の体よりも数十倍、数百倍のの大きさを誇る龍の顔、それよりも更に数十倍の大きさまで、顎門が八方向に展開される。野球場くらい、の、広大な、黒々とした口腔が展開され、突っ込んでくる狗を迎え撃った。

一口。顎門を、一度閉じる。ただ、それだけのことで、無数の狗が食い荒らされる。咀嚼するまでも無く、一口、一飲み。

もう一口、と、大食な龍が顎門を開く。その口腔内には、既に狗達の姿は無かった。

「あああああ！」

更に龍の首を伸ばす菖蒲。左手に走る激痛に顔をしかめ、それを紛らわすように大声を発しながら、三分の一ほどが一度に食い殺された狗の群れの一角へと、龍を侵食させる。

一口。顎門を、閉じる。一飲み。更に左腕の痛みが強まり、黒が、菖蒲の体を侵食する。健康的な色をしていた肌へと、まるで呪詛のように、龍の紋章が上半身へと広がる。

限界だった。これ以上狗を取りこむと、自分が龍に食い殺される。今にも気絶しそうな痛みを押さえつけながら、突き出していた左手を鎌の柄に添え、構える。

次の瞬間から、鎌を、龍が侵食する。“黒”で構成されていた龍の形が、変形していく。元々の龍の大きさと、喰った狗の分を追加した、更に、更に巨大な鎌が、構成される。柄の長さはおよそ二百メートル。刃の長さはおよそ百五十メートル。非常識なまでに巨大な漆黒の鎌が、菖蒲を始点にして構成される。

「しっ、死ねええええええ！　ちくしょうどもがああああ！」

鎌を。菖蒲が振るう。菖蒲自身は、通常サイズの鎌を振っただけ。それをトレースした動きで、巨大な鎌が、猛烈な先端スピードを誇る、暴力的なまでの破壊力の権化となって襲いかかった。

残存する狗が、弾け、砕け散って行く。

そして、その刃は狗だけに飽き足らず、狗を使役していた少女をも、巻き込んだ。

「きゃっ!？」

割と可愛らしい悲鳴を上げた少女が、鎌を構成する闇へと消え失せた。

鎌が形を崩し、周囲を覆っていた黒いガスが徐々に晴れて行く。先ほどまで隠れていた星が、月が、今ははっきりと見える。

「ふー……ふー……」

鎌を振りぬいた菖蒲が、鎌を投げ出し、小刻みに震える左腕を見つめた。喰った分は全て鎌と一緒に吐き出したらしい。先ほどまで黒かった場所は白になり、龍の紋章だけが左腕に残っている。

「お、おわっ、おわ、った？」

全身から力が抜け、その場にへたり込んで、天を仰いだ菖蒲に、しかし、信じられない光景が目に入った。

中空に浮いている、黒い球体。菖蒲の必殺の一撃を。死神同士の戦争で、大量破壊兵器扱いされた菖蒲の全力に、耐えた。

菖蒲が絶望すると、同時。その球体が弾け、中から現れる、狗を使役していた少女と、一人の男性。ジーンズに、地味な色合いのシヤツに茶髪のサラサラの髪をした、優男だ。

しかし、その男性を見て、菖蒲は更に驚愕の色を強めた。

「マルセイユ様!？」

「あ。おとうさーん!」

菖蒲とめぐみの声が重なる。しばしの沈黙。菖蒲がめぐみをギョツとした表情で見つめており、優男と少女は楽しげに笑いながら、菖蒲とめぐみがいるビルの屋上へと降り立った。

「やあやあ、めぐみ。久しぶりだね。ごめんなー、あんまりお見舞いに行けなくて」

「わーい! おとうさーん!」

と。めぐみは、菖蒲がマルセイユと言った優男に駆け寄って、そのまま胸へと飛び込んだ。傍から見ればほほえましい光景であるが、完全に置いてけぼりな菖蒲はその場で啞然とするしかなかった。

まるで漫画のようにめぐみを抱いてクルクル回っていたマルセイユが、じゃれつくめぐみを諭しながら、菖蒲の方に向き直り、一層楽しげな笑みを浮かべた。

「菖蒲。流石だな。久々に見応えのある奮迅ぶりだった」

「……状況を把握できませんが、マルセイユ様」

そう。彼こそ、菖蒲が所属する勢力の長である死神、マルセイユであった。

そして彼は、戯れでこの世に家庭を持つような変な死神であった。菖蒲もそれを知っていたが、まさか、めぐみが彼の娘だったとは考えも及ばなかった。

彼自身の外見は少し日本人離れしているが、めぐみはおそらく日本人の母親の血を多く引いているのだろう。そう考えると違和感も無い。

「いや、なーに。長いこと平和が続いていたから、色々となまっているのではないかと思っただ。それに、最近またウェイトと喧嘩してな。ひよっとしたら“戦争”の再来になるかもしれないから、その気付け薬も兼ねた、サプライズイベントということだ。……彼女の使役、なかなかだろう？ ああの規模で戦闘下級死神を操れる者などそうそうはいないぞ」

そう言っただで示す先にいる、先ほどまで菖蒲に戦闘死神の狗をけしかけてきていた少女が、先ほどまでの挑戦的な態度をどこかに隠した、育ちの良いお嬢様、といった雰囲気身をまとい、一つお辞儀した。結局は彼女も、同じ勢力だった、というわけだ。結局は、全てが茶番劇であつた。

菖蒲は、何度目かわからない、深い深いため息をついた。自分はサプライズイベントで殺されかけたのか、と。

我が上司ながら、手の込んだ悪戯が大好きなのはたまつたものじゃない。死神ウェイトとの不仲もマルセイユの道楽好きが原因という声があるのも、菖蒲は今この瞬間、ものすごい勢いで納得してしまつた。

「まあ、お疲れさん。今日はもうそのままあの世に上がっていいぞ。お前が放りだした死亡同意書もちゃんと回収してあるからな。ああ、そうそう。まあ、だいたい無理しただろうから一週間の休暇を与えよう。以上」

言っただ。マルセイユはそのまま、あの世へと、めぐみの魂を連れて上がって行ってしまつた。

先ほどまで敵対していた少女も、ペコつともう一度お辞儀をし、上がって行く。

ものすごい脱力感。普段の彼女なら啖呵の一つでも切りそうなものだが、そんな元氣も無く、肌蹴っていた巫女装束に袖を通し直し、

コンクリートに落ちていた包帯と鎌を持って、あの世へと上がって行った。

最終幕

普通天国と言えば雲の上を歩いているようなイメージがあるが、別にそんなことはなく、そもそも上空にあるというものも正しくは無い。天国……あの世は、この世とは別の次元に存在しており、上に上がるのも、あの世に入るための通過儀礼のようなものであった。そして、その天国はというと、傍から見ると普通の人間の世界である。

天国の各所に様々な国の様式に乗っ取った街並みが並んでおり、死神も天使も、ついでにそれ以外の地上で死亡して上がって来て転生出来なかった、いわゆる暇な魂も、ごっちゃ混ぜで街に住んでおり、独自に社会活動を行っているのである。

そして、ここは現代日本の様式にのっとって作られた街。

この街のマンションの一室に、死神、菖蒲の部屋があった。

休日の菖蒲は、平日の死神としての仕事ぶりからはまるで想像もつかないようなダメっぷりを見せる。

今日も今日とて、昼過ぎに目を覚ましてかれこれ三時間、トイレに立った以外はずっとベッドの上でゴロゴロと横になったまま、服もミントグリーンのパジャマ姿のまま、テレビを何気なしに見ていた。今テレビでは、最近あの世デビューしたアイドルが、頭上に浮いた光る輪を可愛らしくピコピコ動かしながら歌って踊っていたりする。

「……あー、だる」

抱き枕を抱いて、ゴロン、と横に一回転。隠す必要も、自室では無いのだろう。左腕の包帯は解かれていて、龍の紋章がパジャマの袖から見え隠れする。

普段の休日の彼女もこんなものであったが、今日は冗談抜きで体が重かった。三日前の、数十年ぶりの龍の紋章発動で根こそぎ削れた体力が未だに戻っていないのである。

「うごー……」

ゴロン、ゴロン、と無為に、ベッドの上で転がりまわっていると、突然、インターフォンが来客を告げた。

「……居留守居留守」

と。気配を外に察せられないように布団をかぶった。休日の菖蒲はここまでダメなのであった。

しかし、相手もだいぶ根性があるであろう。インターフォンがしつこく連打され、チャイムの音が四十回を超えたあたりで

「だああああ！ いねえつつってんだろうがーっ！」

菖蒲にしてはだいぶもった方なのだろう。しかし結局ぶち切れた菖蒲は、ベッドから飛び出してドスドスと壁にかかった電話に歩み寄った。

「留守です」

『うわっ、やっと出た！』

三日前、菖蒲に降りかかった厄災の元凶たる少女の声が、受話器の向こうから聞こえた。菖蒲は、ため息交じりに右手を額に当てた。何故、来る。

『開けてよー、おねえさーん』

三日前に比べてだいぶ声が明るくなった気がする。やはり鬱々とした病院生活から真の意味で解放されたからだろうか。

「よしわかった。私の安眠を妨害したバツとして拳骨をお見舞いしてやる。そこに直っている！」

ガチャン、と受話器を引っかけ、足音荒く玄関へ向かい、ドアを開けた。

「こんにちわ、おねえさん！」

今まで見たことが無いような、本当に天真爛漫な笑顔である。病院で達観していた少女と同じものとは思えないほどの。菖蒲の眠い目には眩しすぎる。

「はいこんにちわ。私の安眠を妨害したからにはそれなりの用事があるんだろぅなあ？」

ボキボキボキ、と指を鳴らして凄んでみるものの、内心ちよつとだけ嬉しい菖蒲であった。めぐみは、あんな非常識な死闘を共に掻い潜った、いわゆる戦友である。親しみを感じ得ない。

「これ！ お父さんからの、じれー、だって」

じれー、という言葉と共に、『辞令』と書かれた封筒が差し込まれた。

「はいどうも。お父様によろしく言って」

追いつ返そうとした菖蒲の言葉を切って、めぐみが年相応の輝く瞳を菖蒲に照射した。

「なんて書いてあるの？」

まあ、自分が持ってきた手紙である。内容が気になるお年頃なのだろう。

菖蒲は、ため息一つついて、封を切った。

「来栖川菖蒲殿。中級死神から上級死神への昇進を許可する。ってえええ？」

何故こんな大事な用事をこんな子供に託すかなあ、と、我が上司ながら管理体制には呆れざるを得ない。

「……なお、上級死神は職務として死神見習いの教育……云々……」
そのようなことが書いてある紙の向こうから、めぐみが楽しそうにこちらを見ているのが分かった。完全に、展開が読めた。

「えへへ。死神見習いの、鈴原めぐみです☆」

と。その読んだ展開通り、語尾を楽しげに強める非常に腹ただしい口調で改めて自己紹介をするめぐみである。

三日前のあれは、昇格試験であり、更には見習いとの顔合わせでもあったのだろう。

「ふざけんなーっ！ 私の休日がーっ！」

性根が面倒くさがり屋な菖蒲にとって、通常の死神業務以外の仕事が増えるなどと、許せることではない。確かに、菖蒲の優雅な休日が削れてしまう。そんなこと、良しとしないのだが、マルセイユからの命令は、いわば社長直々の命令である。聞かないわけにはい

かないのだ。

「よろしく願いしますね、先生☆」

「よろしく願いされたくないわどちくしょうがーっ！」

菖蒲の悲痛の咆哮は、夕焼け空へと拡散し、消えていった。

最終幕（後書き）

おはようございます。こんにちわ。こんばんわ。はじめまして。
くろうんもと申します。

私の拙作を読んでいただき、本当にありがとうございます。

さて。今回は唐突に「大量破壊兵器なお姉さん」という中学二年
生病的な設定で戦闘を書きたい衝動に駆られて軽く書き上げてみま
した。腕に包帯とか巻いて紋章を隠すとか、もうアイタタタ、て感
じですね。

色々と説明不足ですが、短編用の急造設定なので、色々と脳内補
完していただければと思います。

では、今回はこの辺で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9605t/>

死神さんの優しくない鎮魂歌

2011年6月23日16時40分発行